

日本の起源で「美」を拓く。

# 飛鳥アートヴィレッジ

Artist in Residence

## 2013 Archive Book



明日香村



平成25年度 文化庁  
地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

### 「飛鳥アートヴィレッジ」2013 Archive Book

発行日：2014年3月

編集：山中 俊広 (プログラム・コーディネーター / インディペンデント・キュレーター)

デザイン：株式会社 企画・創

作品展撮影：長谷川 朋也 (長谷川写真事務所)

印刷・製本：岡村印刷工業株式会社

発行：明日香村役場 〒634-0111 奈良県高市郡明日香村大字岡55

TEL 0744-54-2001 (代表) <http://www.asukamura.jp>

この事業は、明日香村の歴史的風土保存にご尽力頂いた、  
故・寺尾勇氏の妻、寺尾栄氏からの寄付金を活用して実施しました。

## ごあいさつ

律令国家日本が誕生した地「明日香村」。

日本最古の都には四季あふれる豊かな自然とともに村人が暮らし、まさに日本人の心の源流がここに 있습니다。

また、亀石、猿石などの石造物、高松塚・キトラ古墳の極彩色の古墳壁画など古代の文化芸術(アート)が今も存在しています。明日香村はまさしく、日本文化芸術のはじまりの地、「日本アートの原点」といえます。

戦後日本における現代アートの先駆者、国際的にも高い評価を得ている田中敦子氏も、ここ明日香村にアトリエを構えました。歴史的な重厚感と豊かな自然が織りなす、明日香村ならではの空気にその理由があるのではないのでしょうか。

アーティスト・イン・レジデンス「飛鳥アートヴィレッジ」では、若手アーティストが明日香村に滞在し、歴史と自然に育まれた風土に触れるとともに、地域の人々と交流することで、明日香村に内在する

アイデンティティを掘り起こす時空間を創出しています。

その時空間の中で、若手アーティストがそれぞれの手法・表現方法で明日香村の新たな魅力となりうる「次世代の美」を開拓し、そして発信していく取り組みです。

明日香村は、村全域を五感で感じていただける屋根のない博物館『明日香まるごと博物館づくり』に取り組んでいます。また、「飛鳥・藤原」世界遺産登録を目指す中でも、この「飛鳥アートヴィレッジ」が大きなステップとなることを期待しております。

最後になりましたが、本プロジェクトの開催にあたり、ご指導・ご協力を賜りましたスペシャルアドバイザーの先生方をはじめ、ご参加いただきました作家の皆様、またご支援・ご協力を賜りました関係者の皆様に深く感謝を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

2014年3月

明日香村長 森川 裕一



## 飛鳥アートヴィレッジ 2013年度《事業概要》

### ■ 目的

将来性のある若手アーティストが、明日香村に短期滞在(アーティスト・イン・レジデンス)し、そのロケーションからインスピレーションを受けることで従来の発想や枠組みにとらわれない作品を制作・発表(展示)するという一連の芸術創作活動を支援します。「飛鳥アートヴィレッジ」は、アーティストの活動により再発見される明日香村の新たな魅力・価値観を、より多くの方々へ発信することを目的としています。

### ■ 実施体制

主催：明日香村

共催：奈良県立万葉文化館、(財)明日香村地域振興公社

協力：岡村印刷工業株式会社

スペシャルアドバイザー/選考委員：絹谷 幸二(洋画家、大阪芸術大学教授)

建畠 哲(京都市立芸術大学学長)

烏頭尾 精(日本画家 京都教育大学名誉教授)

脇田 宗孝(陶芸家 奈良教育大学名誉教授)

プログラム・コーディネーター：山中 俊広(インディペンデント・キュレーター)

### ■ 実施概要

#### ▷ 公募

募集期間：2013年7月15日(月)～8月30日(金)

募集基準：現代美術などの分野で活動する18歳以上40歳未満のアーティスト  
選考：スペシャルアドバイザーなどによる審査を経て、17名の応募者の中から5名を選出

#### ▷ アーティスト・イン・レジデンス

滞在期間：2014年1月19日(日)～28日(火) [10日間]

滞在所：飛鳥寺研修会館 修徳坊

主なレジデンスプログラム：

19日……………オリエンテーション、奈良県立万葉文化館会場視察

20日……………明日香めぐり、国宝高松塚古墳壁画修理作業室見学

21日……………福西和紙本舗見学、エクスカージョン(烏頭尾 精先生アトリエ)

22日……………エクスカージョン(脇田 宗孝先生アトリエ)、田中 敦子アトリエ見学  
飛鳥資料館(キトラ古墳壁画)見学

23日……………芸術談義(建畠 哲先生、絹谷 幸二先生)

24日～25日…明日香村民泊体験

27日……………奥明日香夜空見学

#### ▷ 成果発表/作品展

展覧会タイトル：「宙の土 土の宙 –そらのつち つちのそら–」

会 期：2014年3月11日(火)～22日(土) [10日間]

会 場：奈良県立万葉文化館 企画展示室

#### ※関連イベント

トークショー「三瀬夏之介と若き表現者たち-日本の起源で美を拓く-

開催日時：3月11日(火) 13:30～15:00

会 場：万葉文化館展望ロビー(先着150人、参加無料)

トークゲスト：三瀬 夏之介(画家、東北芸術工科大学准教授)  
谷澤 紗和子、川本 陸洋(昨年度 参加アーティスト)  
笠間 弥路、磐井 賢志(本年度 参加アーティスト)

会 司：山中 俊広(本年度 プログラム・コーディネーター)



公募チラシ



展覧会チラシ



# 笠間 弥路

K A S A M A M I R O

- 1983 宮城県生まれ
- 2006 多摩美術大学 美術学部彫刻学科卒業
- 2007 Ecoles Nationale Supérieur des Beaux Arts de Paris 交換留学
- 2008 京都市立芸術大学大学院 美術研究科彫刻専攻修士課程修了

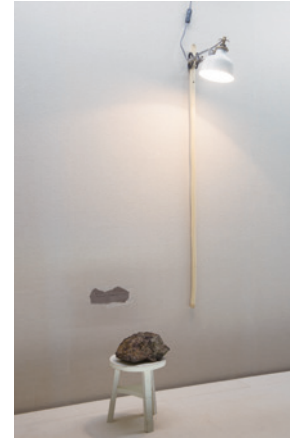
## 〈主な展覧会歴〉

- 2011 「ユートピアのお知らせ」アキバタマビ21(東京) 個展「屋根の下と、眠る人へ、」Gallery 301(兵庫)
- 2012 「Les Phénomènes s'émurent - 一切の事象が蠢きはじめた-」京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA(京都)
- 2013 「KYOTO STUDIO」京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA 「Art Court Frontier 2013 #11」ARTCOURT Gallery(大阪)

毎日空を眺めていました。  
日の出、日の入り、星空、月の時間。神話の土地を歩き、古代のスターの痕跡を通り、神様の社に頭を下げました。そして、最後に星空の下にひっそりと、白く輝く大根を見つけました。星空の下に土をきりひらいてきた人々の物語を実感できる、美しい景色でした。  
飛鳥には既に多くの物語があります。遺跡や石像はすでに完成されており、きっかけにするには難しいと感じました。  
空や星は今のものでも昔のものでもあるものです。歴史というのは想像する事実の一部に過ぎません。残っているものが全てではなく、もっと多くの物語があったのだと思います。  
現存する数々の遺跡や石達は、知られざる物語と私たちの間を行き来し、想像の世界を開いてくれるのです。そして小さな石ころもきっと過去の物語を持っています。  
現実と想像の境界を曖昧にする様に、そして多くの時の複雑な混在を体現する飛鳥を表現したいと思いました。



〈If my house falls down, glass will grow there.〉写真、石、コラージュ、ランプ







## 下野 友嗣 S H I M O N O Y U J I

1984 兵庫県生まれ

2007 大阪芸術大学 美術学科卒業

### 〈主な展覧会歴〉

2010 個展「下野友嗣展」  
ギャラリーAO(兵庫)

アーティスト・イン・レジデンス  
「Project Asia Art Program 2010」(韓国・昌原)

2012 「SHIGARAKI ACT 2012」  
甲賀市信楽町エリア(滋賀)

2013 個展「熊人間の里」  
GALLERY 301(兵庫)

「アラフドアートアニュアル2013」  
土湯温泉(福島)

雨は、空から大地へと循環する自然現象ですが、同時に土地の歴史を知る道具にもなります。飛鳥でのレジデンス中に雨が降り、身体に飛鳥の超自然な力を教えてくれているような不思議な感覚になりました。私はそんな雨を、デフォルメをして岩料を使い描くのと同時に、滞在中に飛鳥で撮った写真を転写した紙や、パネルを加工した画面の上に版画の技法で、鉄錆と墨を使い超自然な物(土地にいる精霊)を描きました。

又、鉄錆と墨を使う理由は、この二つの素材は混ざりやすくも混ざりにくい性質を持つるので、面白い反応が見られます。それは、人間の喜怒哀楽の感情のようなものや生物の細胞分裂や宇宙の爆発を思わせるものがあたりすること等から、原始の感覚を思い起こさせます。この飛鳥の土地は、昔から続いている習慣が残っているものがたくさんあるので、土地の精霊や人間の目には見えない存在がいるように思えました。

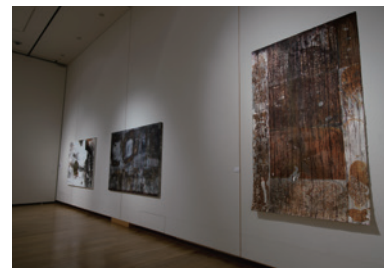
私は、この飛鳥で滞在し制作が出来たことを感謝すると共に、飛鳥にいた精霊の存在を信じ続けていきたいと思っています。



《しみる》高知麻紙、大理石の粉末、墨、鉄錆、岩料 222.0×137.5cm



《空白の器》水彩用紙、大理石の粉末、墨、鉄錆、岩料 58.5×77.8cm



《精霊の声》パネル、水彩用紙、大理石の粉末、墨、鉄錆、顔料インク、岩料、鉄板 145.5×227.3cm







N O D A  
M A R I K O

## 野田 万里子

1985 佐賀県生まれ  
2009 京都市立芸術大学 美術学部美術科油画専攻卒業

### 〈主な展覧会歴〉

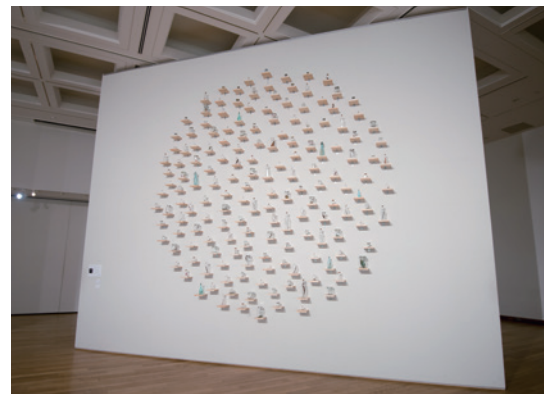
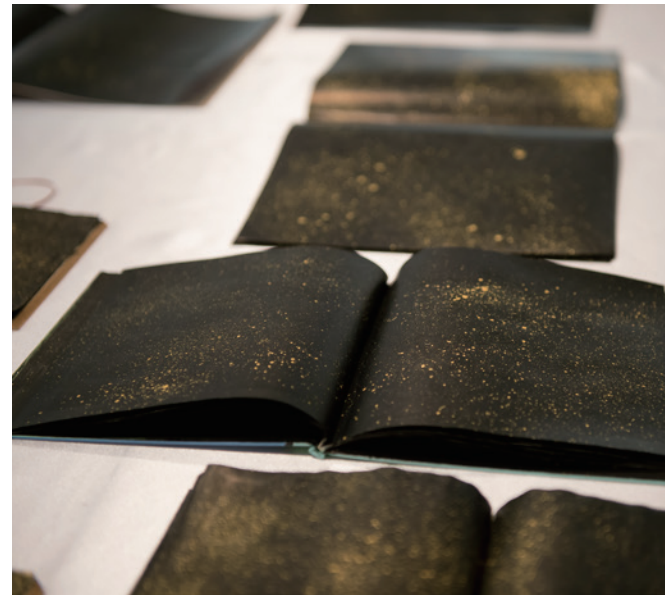
- 2008 個展「野田万里子展」番画廊(大阪/09)
- 2010 「P&E」ARTCOURT Gallery(大阪)  
個展「Fixation」TEZUKAYAMA GALLERY(大阪)
- 2012 「“記憶”をゆり動かす“いろ”／奈良・町家の芸術祭  
HANARART 2012」大和郡山・旧川本邸(奈良)
- 2013 個展「HOPE」TEZUKAYAMA GALLERY

### 《a piece of soul たましひのひとひら》

地面に落ちている石には魂が宿っているから拾ってきてはいけないよ、と誰かが言いました。その土地土地にある変哲のない石に魂が宿るという考え方を私は興味深く感じました。私はその石を、土地のものを敢えて拾い集め、私が明日香を確かに訪れた証として、瓶に取めます。瓶の中にひとつずつ魂を、神様を閉じ込めているかのように。

### 《facing the ancients 識よりもなほ》

星はいつも空にあります。昼も、夜も、都会も田舎も。飛鳥という場所でそのことにはっと気が付いたのです。高松塚古墳の石室には、天井画として星宿が描かれています。古代の人間が永遠の眠りにつき、死後の世界でもやはりこの飛鳥の星が自らの空にあってほしいとおもった想いが、この土地に滞在してみてもしみじみと理解できました。ありったけの知識も、崇高な精神も、完全な肉体も、満天の星空の下ではすべてがいだかれているように、私は感じるのです。



上 《a piece of soul たましひのひとひら》 ガラス瓶、石、植物、板 【協力：ガラス工房さんぽ 小田珠生】  
下 《facing the ancients 識よりもなほ》 本、アクリル、墨、ペン





# 土方大 H I J I K A T A D A I

1989 愛知県生まれ

2011 金沢美術工芸大学 美術工芸学部美術科彫刻専攻 卒業

## 〈主な展覧会歴〉

2012 「KIND OF PASSAGE」金沢アートグミ(石川)

2013 「祭りか？山か？」拝借景(茨城)

個展「Fading in」遊工房アーツスペース(東京)

「trade parade -等価交換の条件-」  
北陸銀行旧問屋町支店(石川)

2014 「虹の麓／ファン・デ・ナゴヤ美術展2014」  
名古屋市民ギャラリー矢田(愛知)

お、これは現実には存在せぬ獣。ひとびとはこれを知らず、それでもやはり—— そのさまよう姿、その歩みぶり、その頸を、そのしずかな瞳のかがやきすらを愛した。

たしかに存在はしなかった。しかし人々はこれを愛したから、純粹の獣が生まれた。人々はいつも余白を残しておいた。そしてその透明な、取っておかれた空間で獣は軽やかに首をあげ、そしてほとんど存在する必要さえもなかった。

人々は殺物では養わず、いつも、存在の可能性だけでこれを育てた。可能性こそ獣に大いなる力をあたえ、ために獣の額から角が生まれた。ひとふりの角が。

ひとりの処女(おとめ)のかたわらに、それはしろじろとよりそった——。そして銀(しろがね)の鏡のなかに、そして処女のうちに、まことの存在を得たのだ。

【ライナー・マリア・リルケ「オルフォイスへのソネット」第2部4より】



〈Asterism〉ガラス、砂、パウダー、写真、アクリルボード







I W A I  
K E N J I

## 磐井 賢志

1990 岩手県生まれ  
2013 東京藝術大学 美術学部彫刻科卒業  
現在 東京藝術大学大学院 美術研究科彫刻専攻修士課程在籍



### 〈主な展覧会歴〉

- 2010 個展「Perfect Star」  
東京藝術大学上野キャンパス内ギャラリー（東京）  
「the Six」ラフォーレ原宿（東京）
- 2011 「BODY SCALE」  
都立芸術高等学校ギャラリースペース（東京）
- 2013 「drawing02-hyphenation」澁谷画廊（東京）  
個展「a.t.o」grill gallery（東京）

私の出身地の岩手では、震災後三年の時を経て、徐々にそこに住む人々の活気を取り戻しつつあります。しかしそこにある空気には、今なお漂う空虚感が存在しています。私は飛鳥へ足を運んだ時の印象に、歴史や人々の充実した空気、つまり地元とは正反対の空気を感じました。

そんな、一見人や歴史、風土に守られている土地にも、空虚感は予期せず訪れるのかもしれない。その空虚感の象徴として、棚田の発祥地である飛鳥の榎殻を使い、飛鳥そのものを表現しました。また、その抜け殻の飛鳥は、壁にある写真作品と対になるわけですが、それはそんな飛鳥が今現在抱えている問題を象徴しています。開発時に植林された杉は、今や地滑りの原因となり、災害をもたらしている現状。やはり人が生きる事や住むと言う事になんらかの緊張感を持つことから、私たちは目をそらさずにはいられないはずではないでしょうか。



《utopia rush》榎殻、木材、写真 【協力：明日香村役場 企画政策課】







# 「飛鳥」と「アート」の理想的な天秤の支点を探ること

山中 俊広 (2013年度 プログラム・コーディネーター／インディペンデント・キュレーター)



明日香村を舞台とし、10日間の短期アーティスト・イン・レジデンスと成果発表の展覧会で構成する「飛鳥アートヴィレッジ」。各地で近年多数展開されている「地域型アートプロジェクト」の多くと同様に、飛鳥地域にある様々な要素を表現に取り入れることを、主催者側がアーティストに求めることを前提としています。この手法によって地域に還元されるべきものは、現地にかかわる人々に、外部からやってきたアーティストがレジデンスでの活動と展覧会での作品を通じて、今まで表に現れにくかった地域の特徴や個性を提示することだと、私は考えています。

今年度は、平面作品に限定した昨年度の応募基準を撤廃した結果、本来からコンセプチュアルな表現をおこなうインスタレーション(空間構成表現)のアーティストの応募が目立ちました。選抜された5名のアーティストが、10日にわたるレジデンスの間、飛鳥に真摯に向き合いながら飛鳥への解釈を深化させ、展覧会での作品を通じて提示した飛鳥は、昨年以上に飛鳥を抽象化させたアプローチとなりました。アーティストたちと共に考えた作品展のタイトル「宙の土 土の宙」に象徴されるように、彼らは飛鳥時代の史跡や

特定の場所といった具体的な要素から離れ、壮大な事象である「空・宇宙」と「大地」に自らの制作テーマを設定しました。このアプローチには、飛鳥のイメージをより本質的かつ根源的なものまで昇華させるという意図もありましたが、一方でどの地域にも共通しうる要素を提示したことには、いま現在の飛鳥への冷淡なまなざしも含んでいたこともあえて書き添えておきます。

本来、現代美術とは、常々表に現れにくい事象や概念を拾い上げたり、現代の価値観に対しての問いかけや問題提起のきっかけを作り出すものでもあります。今年度の「飛鳥アートヴィレッジ」は、結果としてアーティスト側による自らの表現の堅持を前提に地域との理想的な関与を探り、現代美術の領域が提示すべきクオリティにはなりました。ただ、ここ飛鳥においてこのアプローチが理想的かどうかの答えはまだ見えません。「飛鳥」という本来から地域のブランド力が強いという現地の特性にあって、その反映の主軸をどこに取るのかによって、アーティストの「飛鳥」の表現は大きく変容します。飛鳥“時代”の「飛鳥」と、現代の明日香“村”としての「飛鳥」は、必ずしも一致しないという様相を意識すべきです。「国」と「地域」の

両極に位置づけられる昔と今を、現代社会の構造を踏まえながら表裏一体の関係で真摯に向き合えば向き合うほど、そこには純化された相対論が「衰退」というキーワードを誘導してしまう恐れがあります。

すでに歴史と観光資源の枠組みの中で価値が確立している飛鳥時代の諸要素よりも、ここいま暮らしている人々やその生活および環境に焦点を当てるのが、現在の「飛鳥アートヴィレッジ」の目的をより特化させることのできる方策ではないでしょうか。次年度のプログラム構築に際しては、地域側とアート側の交流にあらかじめ特化する手法も選択肢として検討すべきと思います。地域性をより反映させた作品をアーティスト側に求めるのであれば、現状の10日の短いレジデンス期間とアーティストへのサポート体制の調整はもちろんのこと、プログラム内での地域との交流をより推進する前段階として、当プロジェクトの村内での認知の浸透に力を注ぐべきと考えます。それによって、展覧会への来場者も村民の割合を増やす必要があると思います。その足掛かりとして、初めてプログラムとして実施した村民のお住まいに宿泊する「民泊体験」と、参加

アーティストの一人の作品が実質的に地元の人々との共同制作になった今年度の2つの実績は、お互いの立場への歩み寄り、昔と今の飛鳥の印象を両者が共有できた、今後確実に活かされる成果となったと思います。

地域側とアート側の思惑や主張の間に生じる、双方の価値観の差異は、このプロジェクト形態においては常に付きまとう課題です。両者の理想は常に一本の同じ軸の両極にあり、そのちょうど真ん中でバランスを取る選択は、現実的に不可能です。さらに、昔と今の「飛鳥」の価値のバランスも同様です。両者の支点の位置をどこに定めるかを、主催者である地域側が明確に提示することを期待します。その設定があるからこそ、アーティストのクオリティや、「飛鳥アートヴィレッジ」の果たすべき成果が明確になると思われます。2年目の実績を積み重ね、「飛鳥アートヴィレッジ」独自の天秤を明確に調整すべき段階にあることは確かです。